
蒼銀の光

糸冬始

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼銀の光

【Nコード】

N4969T

【作者名】

糸冬始

【あらすじ】

存在を否定された少女―グローリーの世話係として、アルゼンタムは彼女と共に過ごし始めた。二人だけの小さな世界で、彼らはゆっくりと互いの狂気を噛み合わせる。かちり、かちり、歪んだ愛は時計の針のように追いかけあう。――自サイトにて少し遅れて連載中――

00::原罪時点(前書き)

早速ですが残酷描写あります。

00：原罪時点

「お前が悪いんだ」

甲高いボーイソプラノが、無邪気に繰り返す。ぼくは悪くない、お前が悪いんだ。

沈黙が流れる。彼が冷静に戻る前に、少年は腕を引いて抜き出した。もう一度、繰り返すように両腕を突き出す。頬に暖かい液体。

「お前が居るから、本物なんて要らないんだ、役に立たない癖に、お前なんて」

言葉を吐き出す度に、腕を突き出す。いらない、いらない、いらない、と。滑る金属を両手で握りしめ、少年は無表情で言い放つ。

縋るように、彼の手が伸ばされる。きらきらと光る瞳に涙を溜めて、幼い彼はここには居ない誰かに助けを求めた。それを不愉快そうに眺め、少年はもう一度腕を突き出した。

「だから、死んじゃえよ」

赤く染まったナイフを握りしめ、少年はようやく微笑んだ。自分とよく似た背格好の彼を見下ろして、とても幸福そうに笑う。天使のように無邪気で澄んだ笑みに、その血化粧は崇高なもののように良く映えた。

あはは、と少年らしい愛嬌のある声が漏れる。その表情と声はとても可愛らしく、足元に広がる血溜まりに違和感すら感じる程に自然な笑みだった。

少年はナイフを落とし、ポケットからハンカチを取り出して両手を拭いた。遊んだ後を片付けるように、ただ手が汚れたから拭うという以上の意味を込めずにその動作を続ける。にこにこ笑みを浮かべて、少年は呟いた。

「これで、褒めてくれるかな。ぼくの“お母さん”になってくれるかな」

ねえ、と誰かの名前を呼ぶ。少年は赤黒くそまったハンカチをその場に捨て、一仕事終えたように笑みを零した。これでいいですね、と澄んだ声が問いかける。愛する人へ呼び掛けるように、少年は問いかける。

「ぼくを、愛してくれますよね」

それは、起こらなかった過去の断片。

01…蒼薔薇の四人

空の蒼を映したかのような澄んだ色の薔薇が、その庭園には広がっていた。蒼薔薇は屋敷を取り囲み、庭園は一種迷路のように複雑な造りになっていた。剪定が間に合わず、伸びた薔薇によって道が塞がりかけている所もある。

白い壁の屋敷はそこで静かに佇んでいた。屋敷の広さに反して家人の様子はなく、時が止まったようにしんとしている。最低限に手入れされている様子から廃屋ではないと分かるが、そうでなければ人が住んでいるとは思えない空気を漂わせていた。

屋敷の一角には、ぽつりと孤立するように離れがあった。外壁に茨が絡みつき、青い薔薇が少ないながらも花びらを散らせていた。

きい、と微かな音を立てて扉が開き、背の高い少年が離れの一室へと入った。ベッドの中で丸くなる少女を一瞥し、ふと表情を緩ませる。少年がカーテンを引いて光を入れると、小動物のような呻き声を発して少女はぱちりと目を開けた。

少年の緩く癖の付いた髪に朝日がさして、黒が艶やかに煌めいた。端正な顔立ちは気品に溢れており、すらりと伸びた長身にも威圧感を感じない。銀色の瞳が優しく細められ、少女に微笑みかけた。

「おはようございます、グローリーさん」

少年が軽く屈んで覗き込むと、少女――グローリーは困惑を表情に浮かべながら身を起こした。両手でナイトキャップを掴んでぎゅっと深く被り、おそるおそるといった様子で少年を見上げる。薄い青の目には感情を潜ませながらも、その整った顔は人形のように感情が希薄だった。

「……おはよう。あう、アル、ゼンタム」

舌足らずな拙い声で、少年――アルゼンタムを窺うように首を傾げる。耳慣れない響きが発音しづらいのか、グローリーは口を押さええておろおろとアルゼンタムを見上げた。

「ごめん、なさい……」

「構いませんよ。名前、呼んでくれて嬉しいです」

アルゼンタムはベッドの端に腰掛け、グローリーに手を伸ばした。びく、とグローリーは体を強張らせたが、ナイトキャップ越しにそつと撫でられて目を丸くした。アルゼンタムはその反応に一瞬だけ表情を曇らせたが、すぐに微笑を浮かべて優しく声をかける。

「言いづらいなら、アルでも良いですよ」

「アル……」

アル、と何度か確かめるように繰り返し、グローリーは唇をむずがゆそうに押さえた。戸惑うような表情を浮かべているが、感情表現の拙い彼女の精一杯の喜びの表情だ。アルゼンタムも最初は機嫌を損ねるようなことをしたのかと戸惑ったが、最近ではグローリーが何を思っているのか分かるようになってきた。

アルゼンタムは窓をちらりと見上げ、そこから見える青空に不安を顔に浮かべた。

「よく、晴れています。……大丈夫ですか？」

「だ、いじょぶ」

グローリーのぎこちない返答に、アルゼンタムはやはり、と唇を嚙んだ。グローリーは青空やそれを連想するものを酷く怖がるのだ。庭の蒼薔薇にさえ怯えており、その為離れの薔薇だけでも花を摘むことにしている。

”蒼”というそのものを、恐れているというべきか。

否、恐らくは蒼はあるものを連想させるのだろう。空色の髪を、彼女は恐れている。

空色の髪――スカイという魔術師の一族を、グローリーは恐れていた。秀麗な魔術の大家として名を馳せるスカイ家は、強い権力を持つ貴族だ。その一族の者は総じて、空のような蒼から白へのグラデーションの髪を持っている。

「……髪、結い上げましようか。それに着替えないと」

「ん」

短い肯定の返事に、アルゼンタムはグローリーの手を取って立ち上がった。そのまま鏡台までエスコートして座らせ、グローリーのナイトキャップを外す。滑り落ちた髪は癖もなく、床に届きそうなほどに長い。そのグラデーシヨンの流れを手に取り、アルゼンタムは軽く櫛を通し始めた。

毛先に行くにつれ濃さを増す、白から”紅”へのグラデーシヨン。
彼女がグローリー・タブー・スカイの名を持つ理由がそこにはあった。
禁忌の空

十
十
十
十
十

この世界では、魔術というものが栄えている。

世界を巡る魔力を司る一族たちと、その恩恵にあずかり栄えた貴族たちの世界。スカイ家はその中でも有名な魔術師の名家だった。

澄み切った青空のような、蒼から白へのグラデーシヨンの髪。それがスカイ家の最大の特徴であり、最も秀麗な一族と呼ばれる由縁でもあった。直系の者ほど美しい空色をしており、現在当主であるレテウもまた濃い空色の髪を持っている。レテウはスカイの傍系から妻を向かえ、世継ぎはまだできていない——というのが表向きである。

「今日は出かけますから、いつもより丁寧に整えますね」

「ん……」

アルゼンタムは鏡に映るグローリーの顔色を確かめながら、手早く髪を纏めた。鏡台に並べた髪飾りを見比べ、どれにしようかとひとしきり悩み、白と赤の花飾りを手に取る。団子にした髪にそれを飾ると、髪の赤が極力目立たなくなった。グローリー自身の希望でもあるし、それはスカイ本家からの通達にも含まれている。

グローリーは、スカイ家当主レテウの娘なのである。本来ならば当主の娘として華やかな生活を送るであろう彼女は、その髪の色から本家を追放された。

物心付く前に母親から引き離され、スカイ家の所有する別荘に監禁状態で生かされた。故に屋敷の外に出るときは、赤のグラデーシヨンという珍しい髪色を隠し、目立たなくすることが義務付けられている。

尤も、彼女がこの屋敷から出るのはこれが初めてのことだが。

アルゼンタムが仕え始めてから、という訳ではなく、文字通り彼女は、この屋敷から出たことが無い。スカイ家の汚点として隠される彼女が外に出るなど、あり得てはいけないのだ。つまりこの外出は、今回限りの特例。

というのも、スカイ家の者は全員出席と主催者側からのお達しがあったらしい。名指しにこそしなかったが、グローリーの存在を匂わせた上で、だ。当主もさぞ悩んだだろうが、結果としてかろうじての出席となった。

アルゼンタムはこの世界の貴族事情について詳しい訳ではない。雇い主であるバムルウからの話によると、何やらスカイ家のお嬢様の成人を祝うパーティーらしい。スカイ家の裏事情であるグローリーを知っていたのもその為だろう。

エルウ・ダーク・スカイ。

『闇夜空』と呼ばれる彼女とアルゼンタムの最初の接点だった。

02：邂逅の幕開け

「ずいぶん、時間がかかったな」

魔方陣を使い会場となる屋敷に移したアルゼンタムたちを出迎えたのは、疲れたような声色だった。その声にグローリーの体が張り、アルゼンタムの袖を掴む手が小刻みに震えだす。その手に自分の手を重ね、アルゼンタムは出迎えた人物へ目をやった。

「……レディーの仕度には時間がかかるものですよ、バムルウさん」
「スカイ本家の人間にへりくだらないのは、君くらいなものだろうな」

人物――バムルウは責めるような言葉とは裏腹に苦笑を浮かべた。蒼薔薇をモチーフとしたタイピン、ウェーブのかかった短い空色の髪は、スカイ直系に近い血筋の者だと見て取れる格好をしていた。

「おれは責めることは無いが……会場では口を慎めよ」

「それくらい、貴方に言われなくとも分かっています」

そっけないアルゼンタムの態度に、バムルウの表情は苦笑から更に苦々しいものへ変わった。

「きみなぁ……おれへの対応が明らかに悪いだろう」

「当たり前でしょう。グローリーさんをあんな屋敷に閉じ込めて……それが姪にす」

不意に。アルゼンタムの言葉を遮るように、ぱちんと空気がはじけるような音が鳴った。音を遮断する魔術を使い、バムルウがアルゼンタムの声を消したのだ。バムルウは先ほどまでとは打って変わって、怒気を孕んだ声を響かせた。

「誰の耳があるかも分からない場所で、血縁を示唆する言葉を使うな」

「どうせ、口を封じる手を打ってあるんでしょう」

「それでも、だ。……その子はスカイ家とは縁もゆかりも無い、他人だ」

グローリーへと視線をやり、バムルウは忌々しいとでも言うかのように顔を歪めた。バムルウは現当主の弟、グローリーの叔父にあたる。当主に代わりグローリーの管理を任されており、アルゼンタムの雇い主もバムルウである。

だからこそ顔を合わせる機会も多いのだが、アルゼンタムは仲良くする気などさらさら無かった。雇い主が誰であれ、アルゼンタムが仕えるのはグローリーだ。そのグローリーを無碍に扱うスカイ家に対しては、悪印象しか抱けない。

「……くれぐれも、発言には気をつけろ」

バムルウはグローリーを一瞥し、ため息をついた。その音にびくり、とグローリーの肩が震える。バムルウはその反応に表情を少し曇らせ、アルゼンタムに向き直った。

「……この格好なら、問題ないだろう。後はせいぜい目立たないように気をつけていてくれ」

「分かりました」

淡々と、事務的なやり取り。グローリーの震える手を引いてエスコートし、アルゼンタムはバムルウに背を向けた。

礼儀云々を考えるならばきちんとした去り方もあるだろうが、これ以上の会話は危険だとお互いに通じたのだ。長く会話をしているところを見られるわけにも行かない。グローリーはあくまで、スカイ家とは他人なのだ。

それが、何よりの戒めだった。

十
十
十
十
十

緩やかな旋律、煌びやかな装飾。広いホールに高名な貴族である紳士淑女たちが集まっていた。よくよく見回せば空色の髪がちらほらと見受けられ、スカイ家の者だと分かる。

と、グローリーの足が止まり上体がふらついた。慌ててその体を支えるが、顔色が見るからに悪くなっていた。入り口でいきなり立ち

止まった二人組に周囲の眼が集まる。

アルゼンタムは無言で少年らしい笑みをにっこりと浮かべ、何でもない、と示して見せた。幸い、グローリーの他にも立ち止まる者はいたので、すぐに注目は解けた。尤も大半の者は豪華な装飾とそこに集まった顔ぶれに驚いて、なのだが。

「……大丈夫ですか？ グローリーさん」

アルゼンタムの言葉にグローリーは頷きを返したが、とても大丈夫そうには見えない。端々にある空色や多くの人間に驚いてしまったのだろう。あの屋敷から出たことの無いグローリーは、人が複数居るという状況すらストレスになる。

弱弱しくアルゼンタムの袖を掴む手を取り、壁際まですばやくエスコートした。壁の花となっている者たちからも無遠慮な視線が向かうが、アルゼンタムが笑顔で牽制を返すと視線も離れた。

何度か頭を撫でてやると、ようやくグローリーも落ち着いたようだった。おずおずとアルゼンタムを不安げに見上げ、唇が震える。「そうだ、何か飲み物を貰ってきます。緊張して喉、渴いているでしょう？」

アルゼンタムの提案に、グローリーは目を見開いて縋るように袖を掴む力を強くした。ひと時でも離れることが恐ろしいのだろうが、喉の渴きは事実らしく、掻き消えそうな声で答えた。

「ん……くだもの、の」

「果汁のジュースですね、わかりました。ここに居て下さい」

アルコールを飲むことは出来ないの、ボーイか何かにソフトドリンクを取ってきてもらうように伝えたほうが良いだろう。基本的にこういったパーティーでは、シャンパンなどの酒類がメインとして並んでいる。手近なところに居るボーイに目処をつけ、グローリーの頭を軽く撫でて優しく声をかける。

「すぐに戻りますから」

「……」

少し戸惑いながらだったが、グローリーは袖から手を離して頷い

た。幼い精神年齢に似合わず、恐怖に立ち向かうところなど逞しさもある。

適当なボーイに声をかけ、ジュースのグラスが置いてある場所まで向かった。アルゼンタムは道すがら向けられる視線に爽やかな笑みを返し、困惑していた。どう考えても、飾りで付いてきた従者に向けられる視線ではない。

大方、どこかの貴族の子息だと勘違いされているのだろう。アルゼンタムの格好はパーティーに即した身なりの良い格好であり、アルゼンタム自身の挙動にも気品がある。元々の育ちの所為か、仕草に品があるのだ。

否定をすればいいのだろうか、否定するにしても出自を明確に明かすことが出来ない身の上だ。このまま勘違いさせておけば良いだろう、とアルゼンタムは結論付けた。

ジュースのグラスを前にして足を止め、何にしようか、と視線を走らせた。グローリーは好き嫌いがなく、だからこそ満足させるのは一苦勞するのだ。どうせなら喜ばせたい、と甘酸っぱい果物のジュースに手を伸ばし、

「そのアナタ、ワタクシの手を取ってもよろしくてよ」

澄き通った声に、それを止めた。

装飾も少ないシンプルなドレスを身に纏っていたが、それが逆に身に着ける少女の美しさをより強調していた。緩くウェーブのかかった空色の髪は結い上げられ、ほっそりとしたうなじを覗かせている。翡翠色に煌めく双眸は退屈に染まってはいたものの、危うげな魅力をもって視線が惹きつけられる。

美しい少女だった。無垢な子供らしさと上品な大人っぽさが交わって、万人が見惚れるような美しさを孕んでいた。

そこまですら判断して、アルゼンタムは内心でため息をついた。貴族だと勘違いされているだろうとは思っていたが、まさか手を取れと――ダンスに誘われるとまでは思っていなかった。嗜みとして覚えてはいるがそれも昔のことだ、完璧に踊れるとは言いがたい。

かと言って、ここで断ってしまうのはまずいだろう。何せアルゼンタムは一般庶民だ、貴族の言葉に逆らえばどんな罰が下るかも分からない。

面倒だな、と内心で呟きながら、アルゼンタムはゆっくりと傳いて手を取った。口元に笑みを浮かべ、聴衆に対してパフォーマンスのように台詞を口にする。

「それでは、一曲だけ。美しい貴女を独り占めしては、嫉妬に焼かれてしまいそうですので」

「……お上手な口ですこと」

少女の人形のような整った顔に、一瞬侮蔑の感情が混じった。すぐに消えうせたものの、アルゼンタムはそれに内心で眉をひそめた。安穩と生きてきたであろうお嬢様には、浮かべられないような複雑な感情の見え隠れ。

どういうことか、と逸れそうになる意識を、流れ始めた曲に集中させる。曲調、立ち位置を判断して、ゆっくりと少女の背に腕を回した。少女の手が肩に当てられたのを確認して、一歩目を踏み出す。久しぶりだろうと、貴族の余興だろうと、手を抜くつもりはさらさら無かった。

03…抉った言葉

ステップ、ターン、観客へ振りまく笑顔。

半ば無意識に次々と出てくるそれらに、アルゼンタムは内心で驚いていた。一度取った杵柄、覚えたことは早々忘れないようだ。多少文化が違うといっても基本は変わらず、周囲の見蕩れる視線に笑顔を振りまく余裕もあった。

そこまでの注目を受ける理由が、踊っている間に遅まきながらようやく気付いた。少女は空色の美しい髪を持っていた。この髪色を持つ少女など、一人しか居ない。このパーティーの主演、エルウ・ダーク・スカイその人だ。

目立つな、と言われていたがこの目立ちようはどうしようもないだろう。アルゼンタムの方から誘ったわけではなく、誘われたら断れないのは明白だ。何より目立ってはいけないのはグローリーの方であるのだから、自分が目立つくらい良いだろう、と内心で無理やり納得させた。

「……と、」

どのくらいの間だったろうか、曲が終わりゆっくりとステップを止める。エルウに向き合って礼をし、軽く周囲の観客にも会釈して彼女に背を向けた。グローリーを待たせてしまっている、早く戻らなければ。

と、凜とした声が背後からかけられた。

「アナタ、どこのお家の方？ 名前くらいは覚えてさしあげますわ」
心の中で苦虫を噛み潰しながら振り返ると、エルウがまっすぐにアルゼンタムを見つめていた。人違いと思っていたがそうも行かないだろう。幸い、先ほどまでよりかは人目は離れている。

アルゼンタムはエルウへ目を向け、薄く笑みを浮かべて口を開いた。

「俺はアルゼンタム・シュバルツ・リード。貴族でもなんでもない、

ただの一般庶民ですよ」

ただし、その言葉には思い切り侮蔑の感情を含めたが。

端的に言ってしまったえば、光を浴びて輝く少女の立場に気分がささくれ立っただけだった。同じ一族の少女でありながら、隠匿されるグロリーとは対極の位置。周囲から守られ、誉れを受け、愛される立場。

その立場が、たまらなく憎らしく思えた。

エルウは一瞬驚きを浮かべたが、すぐに対抗するように毒舌を返した。

「庶民と踊っ……!？ 貴族気取りも分を弁えなさい。なんですよ、その頭。ワカメ？」

「髪癖が強いのは認めますが、ワカメってなんですかワカメって！それに気取っているわけではなく、育ちが現れていると言っているだけですわね」

「育ち？ 貴族の――ワタクシの苦労も知らずに、よく言えたものですわ」

苦々しく歪められた表情に、どこか懐かしい気持ちを感じた。数年前までの自分を見るような、痛ましさと恥ずかしさが混同するような気持ち。どこか似ているからこそ、こんなにも憎く思えるのだと気付いた。

知っているよ。そんな言葉を飲み込んだ。アルゼンタムは貴族の生活を知っている、知っていてその上で言葉を返す。

「知らないですよ。貴女のことなんて興味も無い」

「……良いですわね、庶民はお気楽で」

不快感を表情にまで表し、彼女は毒を返してきた。が、その言葉は確実にアルゼンタムの心を刺した。不幸自慢までする気は無いが、気楽などと言われるような生き方はしていない。

「それはこちらの言葉です。随分と甘ったるくちやほやされて、羨ましい限りです。どうぞそのままお幸せに」

「アナタなんか、どうせ自由なんでしょう？ 好きな道が選べて、

好きなように進めて。せいぜい楽しんでなさいな」

かちかち、と。時計の針の音が耳障りだと不意に感じた。同時に、彼女の言葉に対する吐きそうなほどの不快感。どこにそんなにも過敏に反応したのか、自分でもよく分からない。

だが、その言葉は確実にアルゼンタムの心を深く抉った。

「……っ、決まった場所にいられるあんたが妬ましいよ！ 家族にも愛されて羨ましいもんだなっ、どうせ皆に愛されてるんだろ！！」

「愛されてなんかーっ」

彼女が手を振り上げ、平手でアルゼンタムの頬を打とうとした――その時。

知らぬ影が割り込んで、エルウの代わりにアルゼンタムを殴った。

十
十
十
十
十

夢の中で誰かの声が、枕元の柔らかな歌声が聞こえた気がした。僅かに開いた目蓋の隙間から、銀色の光が見えた気がした。夢うつつの中でその誰かへと手を伸ばそうとし、

「……あ、れ？」

銀色の髪の子と、顔を合わせた。

貴族にしては質素な身なりだが、透き通った銀色の髪が装飾の必要もなく煌めいていた。きらきらと光る金色の瞳は美しく、利発的な雰囲気と相まって整った相貌を作り出している。年はアルゼンタムよりも2、3ほど上に見えるが、そこまでを判断する間は無かった。なぜなら、

「……っ、ごめんなさい！！」

「え、ええ！？」

恐ろしい素早さで見事な土下座を決めたからだ。

流石に、アルゼンタムも動転して対処が出来ない。目が覚めていきなり土下座をされても反応に困る。視線をさまよわせて、そこが先ほどの会場ではなく小さな部屋であることによりやく気付い

た。

「……気が付きましたのね」

気まずげなエルウの姿を見て、意識を失う直前に誰かに殴られたのを思い出した。察するに、この少年がその犯人なのだろう。原因であるエルウも共に、この部屋へと移動したのか。

「アル……！」

エルウの隣に座っていたグローリーが飛び起き、アルゼンタムへと駆け寄った。普段は人形のようなその顔を確かに悲哀に歪ませ、アルゼンタムの手を握り締める。声を震わせ、その目には涙を浮かべて。

「アル、大丈夫……っ？　痛くない？　もう良いの？」

「……大丈夫、ですよ。痛みはありますが、そこまでのものではないですから」

殴られた痛みよりも、グローリーが感情を露わにした事に言葉が詰まった。今までは微かな変化しかなく、感情を明確に浮かべることなどなかったのに。そんな彼女が泣くほど心配してくれた事が嬉しく、どうすればいいのかわからなかった。

そつと手を伸ばし頭を撫でると、グローリーはようやく表情を落ち着かせた。柔らかく、しかし確かに笑みを浮かべてアルゼンタムを見上げる。

「よかった……」

「問題ないようですわね。シグレ君、別に頭を下げる必要はなくてよ」

エルウの言葉に、少年が土下座したままだったことを思い出す。シグレと呼ばれた少年はおそろおそろ顔を上げた。アルゼンタムを窺うように見上げ、ちらちらとエルウと見比べている。

その様子は加害者であるにもかかわらず、非常に心苦しく感じられた。貴族でもなんでもないのだろうその実直さが、むずがゆくなるような気持ちもある。

「で、でも……そんな」

「俺は気にしてないよ。その……理由もあったんだろうし」

そっと窺うと、シグレがエルウへ向ける視線にはどこか熱っぽいものがあつた。エルウから返される視線も、他の人間に向けていたものとは違う柔らかな温かみを含んでいる。

聞かなくとも、特別な存在なのだろうとは慮れた。それならば、エルウを害そうとしたアルゼンタムを殴るのも頷ける話だ。

ほっと息をついて身を起こしたシグレに、アルゼンタムは爽やかな笑みを向けて言った。

「まあ、お返しに一発は殴らせてくれよ」

「そんな笑顔で!？」

「人殴ったことってあんまり無いから、ちょっと興味あるし」

「そんな興味で!？」

良いテンポで言葉が返ってきた。

不思議と会話をするのが楽しく感じられ、シグレに対して遠慮なく対応できていることに気付いた。最初の出会いからして遠慮がなかったからだろうか、気がねなく言葉が出てくる。年の近い同性など今まで身近にいなかった所為か、こういった会話が新鮮で自然と笑みを浮かべることが出来ていた。

この時が四人が出会い、交差する始まりだった。

04…空色の少女

パーティーも終わりに差し掛かりエルウやシグレと分かれた頃合を見計らって、アルゼンタムはそつとグローリーに尋ねた。

「エルウさんと一緒に居ましたけど、大丈夫でしたか？」

「……？」

グローリーは無言のまま首を傾げ、アルゼンタムを見上げた。質問の意図が伝わらなかったらしい、と気付いて言い直す。

「えっと、エルウさんも空色の髪でしょう？ ……大丈夫、だったんですか？」

グローリーの恐怖の対象である、空色の髪。だがアルゼンタムが気が付いたとき、グローリーはエルウに寄り添うようにして座っていた。あんなにも蒼を怖がっていたのに、だ。

グローリーは唇を引き結び、視線をさまよわせた。しばらく間を空け、ゆっくりと口を開く。

「最初は、怖かったけど……お姉さま、優しくしてくれたから」

「ちよつと待ってください」

思わずグローリーの言葉を遮ってしまった。不思議そうな顔で見上げるグローリーを見つめ返し、眉間によった皺を指でほぐす。今聞こえた言葉を脳内で反芻し、アルゼンタムは確かめるように言った。

「……おねえさま？」

「そう、呼んで良いて、言ってたから。だめ？」

不安そうな表情で小首を傾げて見上げられると、とても駄目だなんて言えない。何なのだろう、何故か脳内に百合の花が咲き乱れる。「っていうか、血縁……いや、良いのか？」

そもそも従姉妹なのだから大きく間違っているわけではないし、他の人間に聞かれなければ良い話だ。聞かれたからといっても、ただ年齢的に姉のようだから慕っていると説明すれば言い訳は立つ。

だが、なんとなく納得がいけない。何故会って数時間でそこまで仲良くなっているのか。アルゼンタムがグローリーととともに会話できるようになるまで、実に半年近くかかっていたのに。

アルゼンタムは迷いながら、グローリーに言い聞かせるように確かめた。

「駄目とかそういう問題ではなく……呼んで良いって言うのは呼ばなければならぬって事じゃないんですよ？」

「うん、でも、なんだか家族みたいで、素敵だなんて思ったから」

その言葉に、アルゼンタムは違和感を覚えながらも妙に納得もしていた。父母の顔すら知らない、血縁者を恐れるグローリーが、”家族”というものに羨望を抱く。親に存在を見離された子供だからこそ、家族というものに憧れた。

「お姉さま、良い人、だよ……？」

不安げに言うグローリーの頭を撫でて、アルゼンタムは苦笑した。アルゼンタムの沈黙を怒っていると思ったのだろう、袖をぎゅっと掴んで見上げる顔はどこか怯えも混じっている。

「分かってますよ。その、俺とは少し合わないってだけです」

「あわない……？」

「……苦手、なんですよ」

あれだけ酷い事を言ったアルゼンタムを慮り、気が付くまでグローリーを慰めていたのだ。その彼女を厭う理由はない。ただシンブルに苦手なのだ。

彼女自身が、ではなく、彼女の立っている場所が、だが。

それは容易に、アルゼンタムの思い出したくないことを思い出させる。

+++++

「という訳で会いに来ました」

「何がという訳なんですの」

呆れた様子を隠そうともせず、エルウはアルゼンタムを部屋に上げた。来客といわれて部屋に招けば、先日毒舌を交わした相手だ、呆れもするだろう。

手に持った包みをテーブルに置きながら、アルゼンタムはため息をついて言った。

「グローリーさんが貴女のことを随分気に入ったらしくて。その、先日はこっちも失礼でしたからね。一応、謝罪の気持ちを表しに来ました。手土産も持ってきましたし」

「手土産？」

怪訝そうな顔をするエルウに、包みを開いて見せた。ふわり、と部屋の中に暖かな甘い香りが広がる。

「かぼちゃのスコーンです。試作は結構作ったので、味は保障しますよ」

薄くオレンジに色づいたスコーンには、かぼちゃの種が彩りを添えている。更に容器に入れたクロテッドクリームと林檎のジャムを取り出し、机の上に並べた。その様子に、エルウは絶句といった面持ちでぎこちなく言う。

「……アナタが作りましたの？」

「何です？ 毒は入れてませんよ？」

首をかしげながら、アルゼンタムはスコーンにクリームとジャムを塗りつけた。焼き立てとまでは行かないが、まだ仄かに暖かさの残る作りたてのスコーン、かぼちゃと林檎は甘さの相性も良いはずだ。その手馴れた仕草に、エルウはため息をついた。

「本当に庶民なんですね」

「育ちは良いですがね、今はグローリーさんに仕える身ですよ。…はい、どうぞ」

アルゼンタムが皿ごと差し出すと、エルウはしぶしぶといった表情でスコーンを手に取った。少し躊躇いながらも、スコーンを口に運ぶ。そのまま微妙な顔で咀嚼し沈黙を続けるエルウに、アルゼンタムは苦笑を浮かべて聞いた。

「どうです？ グローリーさんは美味しいとしか言わないので、率直な意見が聞きたいんですわ」

「……もっと甘い方が好みですわ」

「まずくはないんですね」

素直でない返事だったが、その食の進み具合からして上々の出来だ。アルゼンタムはちゃっかり自分の分も用意し、口に含んだ。口内に広がる甘味を確かめ、眉を寄せる。

「んー、俺はコレくらいが良いと思いますが……ムーニンリットさんもしかめっ面してたしなあ」

「何故そこでお父様の名前が出てきますの！？」

驚愕の事実が判明した。狼狽するエルウに、アルゼンタムは手に付いた粉を払いながら答えた。

「最初に屋敷に入ってお会いしたので、御両親用に持ってきていた分を渡したんですよ。あ、でも奥方の方はにこにこして食べてましたね。一応、毒見って言う意味合いもあったと思いますが、喜んでいただけたようで何よりです」

「本当に食べさせたんですのね……」

呆れたようにエルウが呟く。実際、アルゼンタムも驚いたのだが、自身で食べているところを見せれば警戒も解けるだろう、という理由によりティータイムとなった。

「っていうかなんで最初に父親が出てくるんですか。普通に使用人かと思ったら父親で凄い驚いたんですが」

「うちに使用人は居ませんわ。大抵のことは魔術で済ませますもの」
エルウは言葉と共に、テーブルの脇に置かれていたティーセットを指差した。途端にふわりとそれらが浮かび上がり、カップに紅茶を注ぐ。ソーサーとセットになって、エルウとアルゼンタムの前にゆっくりと舞い降りた。

「……なんて生活感溢れる魔術だよ……」

得意げなエルウに、アルゼンタムは絶句といった面持ちになり思わず呟く。驚きすぎて敬語が抜けていた。

「ワタクシほどの魔力があれば、これくらい造作もなくてよ。ま、アナタには縁のない話かしら？」

くすり、とエルウの唇に嘲笑が浮かんた。アルゼンタムは紅茶に目を向けたまま、エルウに問いかける。

「どういう意味ですか」

「アナタ、魔力が全くありませんわね？」

ティーカップに伸ばされようとした手が止まり、アルゼンタムはようやくエルウに視線を向ける。エルウはくすくすと笑みを零し、その銀の視線を受け止めた。

05：互いに

エルウは自分のティーカップを手に取り、紅茶で唇を湿らせた。そうしてアルゼンタムに視線をやる。

「ワタクシからすれば、相手の魔力量を見破ることも容易いですわ。それにその反応、あまり魔術を見たことがないのかしら？ 育ちが良いだなんて、よく言えましたわね」

貴族であるということは、魔術師であるということとほぼ同義だ。少なくとも、その環境において魔術はとも当たり前のものだ。そして貴族の魔術師にとって、スカイ家にとって、強い魔力を持つかどうかが個人の判断の最大の観点となる。

エルウはティーカップをソーサーに置き、アルゼンタムに視線を向けた。澄んだ翡翠色の中に、笑みが混じる。

「底辺の存在がよくもまあ、スカイ家に潜り込めたものですわね」

「……反論はしませんよ。俺には、魔力がない」

「あら、面白みのない反応ですわね」

アルゼンタムは表情を変えることなくティーカップを傾けた。風味を味わうこともなく流し込み、不機嫌そうな顔を取り繕うことなく答える。

「少々、特殊なんですよ。魔術に親しみのない環境で育ったもので。魔術なんて、戦争くらいにしか使っているのを見たことないですし」
「戦争？ アナタ一体どこの国の人ですの。そんな使い方はあまり聞きませんわよ？」

エルウの言葉に、アルゼンタムはにっこりと爽やかな、かつ薄っぺらな笑みを浮かべた。そのまましばしの沈黙が流れる。

「……言う気は更々ありませんのね」

「こっちも諸事情がありますから」

スコーンを口に放り込んで咀嚼し、アルゼンタムは目線を逸らした。アルゼンタムの諸事情は、言っただけで巻き込んでしまう代物

だ。迂闊に口に出すことも出来ない。

エルウはアルゼンタムの態度にしばらく顔をしかめていたが、諦めたのかため息をついて紅茶に口付けた。お互い言っていないことは山ほどあるが、詮索をしても時間の無駄だ。

「そういえば、手紙でも書いていたんですか？」

「え」

目線を逸らした先――机の上に置かれた紙とペン、インク壺を示して言うと、エルウは表情を凍らせた。気にせず、なんの装飾もない紙を眺めて言葉を続ける。貴族相手に手紙を送るなら、金や銀で装飾されていてもおかしくないものだが。

「随分、質素な紙ですね……誰か、知り合いにでも？」

「え、ええ。まあ、その、そんなところですよ」

「なんだ、クラウディか」

「どうして分かりましたの!？」

焦りながら頬を染めるなんていう乙女な行動を見せ付けられれば分かるというものだった。相手がシグレ・クラウディならば、変に上質な紙を使うこともないだろう。

が、その紙はインクの染み一つなくまっさらであり、一言も書かれていなかった。書かれていたところでアルゼンタムには読めないのだが。

「どうして何も書いてないんです？　話題に困るってこともないでしょう」

「だって、その……」

口ごもりただの少女のように俯く様子に、アルゼンタムは苦笑をかみ殺した。近況を綴るだけでも彼は喜びそうなのだが、やはり彼女も恋文ともなれば緊張するのもかもしれない。

「し、”親愛なるシグレ君へ”では馴れ馴れしすぎるかしら……でも”拝啓、シグレ様”は堅苦しく思われそうですわ……」

「そこから悩むのかよ……」

話題以前の問題だった。アルゼンタムの呆れた声を気にせず――

というより気付いていないのだろう、エルウは紙と向き合ってその整った顔を困惑に染めている。そうしていると、本当にただの少女のようだ。

人形のように整った相貌に朱が指し、翡翠の瞳は戸惑うように揺れている。ドレスに包まれた細い手足は妖精を思わせる造形、空色のグラデーションは緩やかにウェーブして背へと流れている。美しい、と表現するのが正しいのだろうか、その表情の所為かどうにも可愛らしいという印象が強い。

その横顔を眺めて、アルゼンタムは無言のまま背後へと忍び寄った。

十
十
十
十
十

長い沈黙の後、ようやくペンを手に取ろうとしてエルウは違和感に気付いた。いつも視界の端に見える空色が少ない。そういえば、首筋に風が通っているような。

「……っな!？」

「あ、動かないで下さいよ。あと少しなんですから」
アルゼンタムが背後に立ち、何故か髪を結び上げていた。振り返ろうとしたエルウの肩を掴んで止め、アルゼンタムは真剣な声で続ける。

「全く、なんで背に流すだけなんですか。グラデーションが映えますけど、かなり長いんですから少しは結び上げましょうよ」

「な、何を言ってますの!？」

肩に置かれた手に、エルウの体が強張る。エルウは貴族のお嬢様なのだ、異性と触れ合うなど滅多にあることではない。踊ったときに触れ合っていると言えはそうなのだが、あれは形式美的なものだ。それ以外の触れ合いなど慣れておらず、心臓に悪い。

「っ、手をどけなさい!」

「じゃあ動かないで下さいよ?」

アルゼンタムは一言言うと肩から手をどけ、また髪を結い上げる作業に戻った。が、それでも背後に立たれたままなので、妙な居心地の悪さがある。エルウは先ほどまでアルゼンタムの手が乗っていた肩に手をそっと触れ、顔に困惑を浮かべた。こんな風に親しげに肩を触る存在など、今まで居なかった。

アルゼンタムは夢中になって髪を弄っていたが、しばらくして大きな息をつくと手を離した。

「髪飾りを使えなかったのが残念ではありますが、まあこのくらいにしておきましょう」

「一体何をやったんですの……？」

「自分で確かめてくださいよ。鏡、どっかその辺にあるでしょう」
不機嫌そうな言葉とは裏腹に、アルゼンタムの顔には満足げな笑みが浮かんでいる。エルウは魔術で鏡を手元に寄せ、恐る恐る自分の姿を確かめた。

左右へ細く編まれた三つ編みが後頭部へと回り、ふわりと流れるように纏められた残りの髪へと繋がっている。空色のグラデーションが上手く利用されて、上品に、しかし可愛らしく結い上げられていた。

「やっぱりグラデーションの色を生かすには編みこむのが一番ですね。毛質自体に緩やかなウェーブがかかってますから、全部纏めきらずに少し残して流したのも正解でした。飾りが無いのが惜しいですが、及第点って出来ですね」

ぶつぶつと自己評価を呟き、アルゼンタムはようやく髪から手を離した。エルウはほっと胸を撫でおろしたが、アルゼンタムは離れるどころか接近した。至近距離でエルウの顔を覗き込み、アルゼンタムはふわりと笑みを浮かべた。

「うん、可愛い」

「……ッ!!」

見る見るうちにエルウの白い肌が薄紅に染まりあがった。美しい、綺麗と世辞を並べられることは今までもあったが、可愛いだなんて

言われなれていない。

「っ、な、何を言っていますのこのワカメ!!」

「ワカメは止めてください!　　っていうかその綺麗な髪を放っておく貴女の神経が理解できませんね!　馬鹿じゃないですか!」

「ば……っ、喧嘩を売ってますのっ?」

「はあ?　褒めてるに決まってるでしょう!」

「とても褒められてるとは思えなくてよ。というか、髪フェチですのね、この変態!」

「変態には異論がありますが、髪フェチはまあ譲りましょう」

「否定しませんの!」?

お互いに、知りたくもない一面が垣間見えた瞬間だった。

+++++

余談だが、エルウは手紙にアルゼンタムの気に喰わなかったところを列挙して送り、後日その手紙を読んだシグレが若干思い悩んだり嫉妬したりすることになる。

06：ここに居る意味

ある朝、アルゼンタムがいつものように目を覚ますと、不審者が居た。

「あ、おはよーアルゼンタム。相変わらず無駄な美貌に磨きがかかってるね！」

「何しにきたんですかマジで」

体を起こし不審者——黄緑に煌めく水色の長髪の少年に胡乱げな目を向ける。少年は同色の瞳をくると楽しそうに輝かせて首を傾げた。重苦しい黒いローブですっぱりと体を覆っている割に、その挙動はとても軽い。

「ホラ、定期的に様子を見に来るって言ったじゃない。あの子どう？ えーっと、グロテスクちゃん？」

「グロリーー！ グロしかあってないじゃないですか！」

あははそうだっけ、と快活にわざとらしく笑う少年から視線を逸らし、アルゼンタムは辺りを見回した。どうやら今回は彼一人のようだ。以前見に来たときはやたらと大人数で騒がしかった。

何故仕事の様子を見に来るだけなのに、団体で観光に来たかのように一泊していくのか。

「そりゃ、アルゼンタムの料理美味しいし？ なんだかんだ言ってもてなしてくれるし」

「……もはや目的そっちのけじゃないですか。良いんですか、『心眼』」

アルゼンタムの思考を知っているかのように、『心眼』と呼ばれた少年は言葉を返した。浮かべる笑みを大人びたものへ変え、柔らかに目を細める。

「悪いことなんてあるかい？ 『組織』に属する者たちが仲良くしてくれるんだもの、友達も増えるし良いじゃない」

「ここは集会場でも遊び場でもありません」

アルゼンタムの冷たい言葉にも、『心眼』はにこにここと笑うだけだ。アルゼンタムは用意しておいた着替えに袖を通しながら、呆れたようにため息をついた。人前で着替えることに気恥ずかしさを覚えるような年齢ではないし、第一相手が『心眼』ならば恥ずかしがる意味もない。

一番隠したいことでさえ、彼の前では丸裸も同然なのだから。

「まったく……定期的に様子見とか言っても、こんなところじゃ何も起こらないでしょう」

「いやいや、起こるかもしれないじゃない。ほら、スカイ家って何かときな臭いし」

それに、と無邪気に『心眼』は言葉を続ける。

「異世界のことを見回らないと、『組織』の名が廃っちゃうしねえ」

十
十
十
十
十

異世界——文字通り、異なる世界。

国が、文化が、環境が異なるというだけではない。それは世界という言葉の通り、世界を構成する基盤が、次元そのものが異なる。この世界は魔力が巡り魔術が栄えているが、魔力など存在しない世界もある。魔術に近いものはあっても、その理論が同じことなど世界の数が無限だろうとまずないだろう。

その境目は時折触れあい、稀にその境を越えるモノもある。意思の有無など関与せずに、属する世界と違う世界へと渡るのだ。そういつて渡ったモノを元の世界に帰したり、その世界の規律を乱すようであれば相応の処理をする。それがこの『組織』の主な仕事だ。

さっさと部屋を出るアルゼンタムを追いかけ、『心眼』は早歩きの中で背中をかけた。外見は幼い少年そのものなので、後ろを付いて回る姿は愛らしくもある。が、その中見は酷くたちの悪い老獪な存在であるため可愛がろうという気はない。

「グロリーちゃん、まだぐっすりお休みか」

「そりゃ、こんな早朝に来ればそうでしょう」

「好都合だもの。あの子に異世界の話を聞かせるわけにはいかないからねえ」

異世界の存在を、不用意に教えてはならない。

この仕事に就く際に何度も注意されたことだ。数少なくはあるが異世界へ故意に渡る力を持つものも存在する。異世界を取り仕切る『組織』からすれば、異世界の存在を意識する者を不用意に増やすのは得策ではない。

だから、アルゼンタムは自分の出自をおいそれと漏らす訳にはいかない。エルウに尋ねられた時はひやりとしたが。

「誤魔化すのも面倒なんですよ。グローリーさんは気にしませんけど、気にする人も居ますし」

「あはは、その辺はキミの口八丁に任せるよ」

「完全に丸投げじゃねーか」

思わず敬語が抜けた。普段は敬語で話しているのが楽なので敬語で話しているが、気を抜いていると地の口調が出てしまう。『心眼』に対しては気を抜いているというよりも、敬意が今一ないからなのだが。育った環境が大きく変わった事がある所為か、どうにも口調に統一性がない。

アルゼンタムもまた、異世界の出身なのである。それも、二度三度と住む世界と身分を変えている。

ある世界では普通の子供であり、ある世界では貴族として。『組織』では珍しくもない経歴だが、アルゼンタムはその経歴によりグローリーの世話係に命じられた。

アルゼンタムが貴族として過ごした世界とこの世界の貴族文化が近いものであったこと。アルゼンタムの容姿が然程目立たないこと。それらの理由により、アルゼンタムはグローリーの元へ派遣されたのだ。

グローリーの世話係として、アルゼンタムの存在は適任だった。存在を隠さなければならぬグローリーの存在を知る人間は、決

してスカイ家を裏切ってはならない。もちろん、様々な方法で外へ情報が漏れることは防いでいるが、何より注意すべきなのはやはり世話係だ。

だからこそ、どの貴族の陣営にも属さず、世界からも外れた異邦者――アルゼンタムを『組織』は売り込んだ。その際、異世界の人間であることを知らせずにどんな手練手管で丸め込んだのかと思うと、『心眼』のことがそら恐ろしくもある。

「何失礼なこと考えてるのさ。ボクはただ仲介をただけだよ。」

『心眼』は唇をとがらせ、無言のアルゼンタムに言葉を返した。正しく、心の眼で読み取ったかのように。

幼い外見に反して、『心眼』は他人の心を読み取る力を持つ『組織』の実質的リーダーだ。本人曰く、化身という生物ですらない永遠に近い存在。何百年も生きていたとか、血の繋がらない子供が居るとか、恋人が居たとか。どこまで真実かは知らないが、噂には事欠かないきな臭い存在だ。

沈黙を続けるアルゼンタムに『心眼』は唇を尖らせた。外見相応の子供っぽい仕草で不満を顕わにしてぶちぶちと呟いた。

「あーもう、また脳内で人のことをそんな不審者扱いするー。そんな酷い子に育てた覚えはないよ？」

「奇遇ですね、俺も育てられた覚えがありません。第一……」

育ての親は、ただ一人だけだ。

零れそうになった言葉を飲み込んでアルゼンタムは口を嚙み、『心眼』から視線を逸らした。彼のことだから赤裸々に内心を読み取っているのだろう。どうせ知られると分かっていると、どうにも口が緩んでしまうようだ。

そんなことより、とアルゼンタムは無理やり思考を切り替えた。朝食を作らなければならないし、そろそろ街に下りて買出しもしなければならぬ頃だ。必要なものを頭の中でリストアップし台所へ向かうと、『心眼』は飽きたのか付いてこなかった。飲食が出来ないとか前に零していたので、台所は縁遠いのだろう。

磨き上げられたシンクを前にして、何にしようか、と考えを巡らせる。グローリーは最近ますます表情が増えてきており、笑顔を零すことも多くなってきた。アルゼンタムの料理を食べて、おいしい、と笑う。何を食べてもおいしいなので、少しつまらなくもあるが嬉しくもある。

そんな顔をもっと見たいと思うから、この先の見えない日々も過ごしていける。

07：心のうち

ホットサンドを片手にダイニングに戻ると、妙に緊迫した空気が漂っていた。楽しそうに笑う『心眼』の視線を追い、ため息をつく。

「……あ、あるっ」

細く空いたドアの隙間から、グローリーが涙目で覗いていた。ドアを掴む小さな手が小刻みに震え、視線がアルゼンタムと『心眼』を右往左往する。

「その、あおいひと、だれ」

「グローリーちゃんおっはよー。ほらほら、まずは朝の元気な挨拶からというじゃない。挨拶は円滑なコミュニケーションの基本だよ？」

にこにこ笑みを浮かべてまくし立てる『心眼』に、グローリーの涙が膨れ上がった。見知らぬ他人、蒼っぽい髪と瞳、会話が通じない、と恐怖心を煽る要素でいっぱいなのだから無理もない。アルゼンタムが戻ってくるまで、ずっとこうだったのだろうか。

とりあえず手に持っていた皿をテーブルに置き、グローリーに近寄って膝について抱きしめた。身長差が激しい為、こうでもしないと抱きしめてやることすらできないのだ。肩を優しく叩き、ゆっくりと頭を撫でる。

「……怖かったですね。もう大丈夫ですよ」

「良いシーンっぽく言ってるけど、確実にボクが悪役じゃないか」

「何か間違いがあるとしても？」

「うっわ、良い笑顔ー」

グローリーが”蒼”にトラウマがあることを承知で話しかけるのだから、悪意以外の何ものでもないだろう。『心眼』の髪と瞳は黄緑みがかったいるものの、明るい水色。グローリーが恐れるには十分だ。

震えるグローリーを宥めながら、アルゼンタムは『心眼』に責め

るような視線を向けた。

「グローリーさんを虐めないでください」

「虐めるだなんて人聞きの悪い。ただ挨拶してただけじゃない」

「友好的に挨拶したいなら、まずはその髪をどうにかしてからにしてください」

染めろ、むしろ禿げろ、と内心で思いきり悪意をこめて呟く。グローリーに聞かせられない言葉は内心で言ってしまう、『心眼』にのみ伝わるのが便利だ。案の定、『心眼』は顔を引きつらせた。

「その爽やかな品のある笑顔で内心がチンピラとか……」

「そんな人聞きの悪い、ただ本音を零しただけですよ」

「より悪いよ」

はあ、とため息をついて『心眼』は呆れたようにアルゼンタムを見た。上から下までグローリーとセットで眺め、感情を失った声で呟くように訊ねる。

「……ところでアルゼンタム、自分が今どんな風に見えているか、自覚ある？」

「はあ？」

急に表情と声色を変えた『心眼』に胡乱な目を向ける。見たくないものを見たかのような、お腹いっぱいとも言いたげな顔だ。

「どんなんて、別にこれといった特徴もないでしょう。兄妹みたいに仲が良い、とでも言いたいんですか？」

確かに仕えるべき主人であるグローリーと余りに親しいのは、貴族のお嬢様なのだし少々不躰かもしれない。が、ここに居るのはアルゼンタムとグローリーの二人だけなのだ。公の場に出ることもそうないのだし、目くじらを立てることでもないだろう。

『心眼』はそうじゃなくて、と言葉を濁らせてため息をついた。その呆れを含ませた表情にアルゼンタムはグローリーを見下ろし首を傾げた。グローリーも真似するように、見詰め合ったままこてんと首を傾げる。再び、ため息。

「そんな事しといて自覚ないんだ……びっくりだよ、もう。つまり

ね、まるで恋人みたいだって言っているんだよ」

「……………は？」

「ああ、本気で思い至らなかったんだね。思考回路に一片たりともそういう方向がないのか。あのねえ、キミ一応は年頃の男の子だろう？」

「いや、その、若干失礼なのは置いておいて……恋人って何ですか恋人って」

「そんな風に幸せそうな笑みを浮かべて抱きしめあってる姿を見せつけられたら、誰だってそう思うよ」

「……」

改めて、自分の姿勢を見直す。

身長の低いグローリーに合わせて膝を突き、怯えて擦り寄ってきたグローリーを慰める為に背に手を回している。グローリーは『心眼』の言葉の意味がよく分かっていないのか、アルゼンタムの胸元に顔を寄せて不安そうに困惑を浮かべている。

確かに、恋人同士の愛の抱擁に見えなくもない。というかそうとしか見えなくなってきた。

「……14歳と12歳ですが」

「なんかこう、初々しいカップルみたいなの。二人とも見た目は良いしねえ」

中見が残念だなあ、という声を見無視して、グローリーへと視線を移す。にっこりと笑みを向けると、強張っていた表情が少し和らいだ。

「あれはとりあえず無害だから安心してください。でも情操教育に悪いので部屋に戻りましょうね」

「当人を前にして思い切り失礼だね」

「さ、朝食は部屋で食べましょう」

「しかも無視かい」

グローリーはアルゼンタムと『心眼』を何度か見比べ、こくりと頷いた。信頼度において、アルゼンタムの指示に従うことにしたよ

うだ。ホットサンドの乗せられたトレイを受け取ると部屋を出て行った。

足音が遠のいたのをしっかりと確認し、アルゼンタムは『心眼』に向き直った。先ほどまでグロリーに対して優しく笑いかけていたとは思えない冷めた視線で、酷く面倒くさそうに言う。

「全く、ふざけたこと言わないでください。グロリーさんが妙な勘違いでも起こしたらどうするんですか」

「そこまで否定するって、逆にキミの方があの子に失礼だろ……。少し天然っぽいけど可愛いし、キミを慕っているじゃないか」

「ありえませんよ。俺が、グロリーさんに恋愛感情を抱くなんて」ここに來てから一年が過ぎ、その間にグロリーは様々なことを吸収していった。赤子がすすくと育つように、グロリーはアルゼンタムと出会い成長した。

だからこそ愛しくはあるが、それは恋愛感情とは程遠いものだ。兄妹ですらなく、父娘のようにしか愛情を感じない。年齢は2歳しか離れていないが、親子同然の関係なのだ。恋心など抱けるわけもないし、グロリーもそうだろう。――と。

『心眼』はそれら一連の思考をアルゼンタムの内心から読み取り、嘆息した。思考回路から恋愛がすっぽりと抜けているのはその所為なのだろう。思春期の少年とは思えない程に慈愛的で、恋慕の発想すらないようだ。

「……しかも自覚はない、ときたか。将来が不安だなあ」

「何の話ですか。用が終わったらすぐ帰ってくださいよ？」

アルゼンタムは眉をひそめて『心眼』に言い放った。自分自身の思考回路に疑いがない所為か、アルゼンタム自身は自分の感情をしごく真つ当なものだと思っているのだ。

「ああもう、分かったよ。とりあえずは大丈夫なようだし、他にやることもあるからね。そろそろお暇させてもらおう」

「是非そうしてください」

「……やっぱりキミ、ボクのこと嫌いだろう」

「そんな、本人に向かって言うなんて酷いことできませんよ」

「気遣うような笑顔でそれ言われると傷つくよ！」

『心眼』とのやりとりもをしている間も、アルゼンタムの心はひどく屈んでいた。多くの人間の心を視てきた『心眼』からすると、とても不安定でどこか燻っているような感覚になる。何か根本的なところでずれている感覚。

頻繁に様子を見に来るのはスカイ家の動向を探る目的もあるが、アルゼンタムの様子見でもあるのだ。生まれて間もなく『組織』が関わり、人生が大きく歪んでしまっている子。感情移入してしまうのは『心眼』の悪い癖だが、こればかりはどうにもならない。

「ねえ、アルゼンタム」

少し調子の落とされた声に、アルゼンタムの体が緊張し強張った。先ほどまでのどこかふざけた調子とは一線を画する声で、『心眼』は静かに問いかける。

「まだご両親に会う気にはならないのかい？」

「……会うつもりはありません、これからも」

背を向けたアルゼンタムの心はざわざわと波立っていた。苛々する、煩わしい、消えてしまえ。憎悪の言葉と汚いスラングが脳内を埋め尽くす。

「そう……会いたくなったら、いつでも言ってね」

「そうですね、会いたくなったら、連絡させていただきます」

そんなことはありえないけど、とアルゼンタムは内心で付け加えた。向こうだって、こっちに会うのは願い下げだろう。興味なんてないだろうし、会う理由だってない。

何せ、物心つく前にアルゼンタムを捨て、以来直接会ったことはないのだから。

08…包囲網の憂鬱

そろそろか、とアルゼンタムは時間を確認して仕度を始めた。以前から様子を見ていたが、そろそろ一度行っておくべきだろう。

この屋敷は元々スカイ家の別荘だった所為か、長期保存が出来る倉などはあるが菜園は存在しない。グローリーの存在を広めるわけにはいけないので、もちろん届けてもらうことも出来ない。なので日用品や食料などはアルゼンタムが定期的に買出しをしているのだ。最初は戸惑ったが、今ではごく普通に行えている。身体を鍛えていないので大した量は運べず、それなりの頻度で街に向かうためだ。流石にグローリーの下着や生理用品などを買うときは困ったが。店員に氣遣うような苦笑いをされた。今でも恥ずかしくはあるので悩みの種である。

買い物メモを確かめて、アルゼンタムは薔薇園の方へ歩を進めると、くい、と服に引っかかりを感じた。

違和感を感じて足を止めると、グローリーが困ったように唇を引き結んでアルゼンタムの袖を掴んでいた。

「どうしたんですか、グローリーさん」

しゃがみこんで目線をあわせ、優しく問いかける。完全に子ども扱いだが、そうとしか思えないのだから仕方が無い。ぎゅっと掴んだ服を弄りながら、グローリーは潤んだ目でまっすぐにアルゼンタムを見つめた。

「も、戻ってくる？」

「当たり前ですよ。ちよっと買出しに行くだけですから」

大丈夫ですよ、と。赤の混じる白髪を撫でてやると、グローリーはくすぐったそうに笑みを零した。蒼髪であるエルウが平気になった所為か、あのパーティーから半年ほどでずいぶん表情が豊かになった。その点においては感謝しても良いかもしれない、とは思う。

エルウとはなんだかんだで、たまに遊びにいったら毒舌を交わす

仲に落ち着いていた。毒舌を交わすといえども決して仲が悪いわけではなく、むしろ良いくらいだ。互いに気を許しているからこそ、正面きって悪口を言い合えるのである。

「悔しいなあ……」

だからこそ、彼女が妬ましくも思える。自分が一年かけても出来なかったことを、ただその色を持つというだけでやってのけてしまった。半年はあったといえど、グローリーはここから出られないのだからあれ以来直接は会っていないのに。

「ん、なあに？」

「なんでもありませんよ」

首を傾げたグローリーへくすぐるように頬を撫でると、きゃあ、と悲鳴と笑顔が溢れる。表情にあわせるように、感情もまたグローリーの中で分岐し複雑化している。出会った頃は不快感や恐怖といった感情しか持たなかったが、今はよく笑い言葉数も増えた。

だからこそ、戸惑う。人形のように無垢だった彼女は、いつしか人間のようになる。

それを望まないなんて、あるはずなのに。

「いってらっしゃい、アル」

向けられた透き通った無垢な笑顔に、アルゼンタムはかろうじて笑顔を返した。望まないはずなんてない、こうやって感情が増えていくのを見るのは喜ばしいことだと納得させる。優しく頭を撫でてやり、違和感のぬぐえない言葉を返した。

「いってきます」

十
十
十
十
十

庭の片隅にある転送装置を使い、近場の街まで転移する。どういう理屈かは知らないが、魔力がないアルゼンタムでも扱える優れものだ。そういったことに詳しくそうなシグレに聞けば分かる気もするが、あのパーティー以来会っていない。アルゼンタムはグローリー

の世話があるため長く屋敷を開けることはできないし、シグレは学生だ。接点などあるわけが無い。

「せっかく仲良くなれたのに……せめてなんていう学校なのか聞いておけばよかったかな」

でもこっちの出身とかは明かせないしなあ、なんて独りごちながら慣れた街を散策する。見目麗しい貴族のお嬢様とお近づきになったことよりも、少し仲良くなった少年のことが気にかかる。今までの友人関係のわびしさの賜物だった。

ため息をつきつつ手元のメモを確認する。この世界の文字は読み書きできないので、書かれた文字は故郷のものだ。『組織』のおかげで言葉は通じるのだが、文字まではカバーできないらしい。

「えっと、今日は魚と肉と……調味料もいくつか買わなきゃな。うーん、分けて運ぶか？」

アルゼンタム一人で運ばなければならないので、金銭に余裕があっても大した量が買えないのだ。割と頻繁に訪れるので顔なじみの店も何軒かあるほどである。そして

「あ、アルゼンタムさん！ 今日は何を？」

「そんなのよりっ、今日こそうちに寄ってってください！ サービスします！」

「ちよっと、今日こそアタシのところで買うのよ！ 順番は守りなさいよ！」

毎回といって良いほど、街に入ってすぐに少女たちに捕縛される。というか順番ってなんのことだろう。

場違いな雰囲気少年がどこからか面白い物に来る、ということでも最初こそ街の人からも警戒されていた。が、可愛らしい子供であることを最大限に活用して、アルゼンタムは瞬く間に街に受け入れられた。

アルゼンタムの正体について言及する者は居ないが、どうやら「良家に仕えて身を立てている没落貴族の御曹司」というよく分からないキャラ付けで落ち着いたようだ。微妙に外していない辺りが侮

れない。

アルゼンタムは周囲を囲む甲高い声に辟易しながらも、なんとか笑顔だけは保って声をかけた。

「えっと、今日は食材の買出しに……とりあえず魚屋に」

勝利の雄たけびと失意の悲鳴が上がった。アルゼンタムが歩けば、まるでどこぞの童話のようにぞろぞろと少女たちがついてくる。身なりの良いアルゼンタムはもちろんのこと、少女たちも素朴ながら懸命に着飾っているのてちよっとしたパレードのようだ。

「今日は他にどこに行くんですか？」

「あの、買い物の後、お時間あります？ 良ければカフェにでも」

「抜け駆けじゃなしよ。ね、アルゼンタムさん、皆で行きませんか？」

周囲から質問の嵐が飛び、過剰だと思われるスキンシップに頬が引きつりそうになる。腕や身体に押し付けられる暖かで柔らかい感触も、アルゼンタムにとっては邪魔だとしか感じない。きやあきやあと甲高い声が耳障りで、互いに牽制をかける少女たちの攻防が煩わしい。

「も、もう少し、離れてくれ、ませんか」

アルゼンタムのはかない抵抗に、不満の声が上がる。照れてるんですかあ、可愛いですね、私の方がグラマーですよ、とよく分からない主張まで始まる始末。好意を向けられているのだろうと予想はつくのに、全く思い通りに行かない。好意を抱けば、その人に尽くそうとは思うのではないのだろうか。

「……………はあ」

アルゼンタムも男なので女性に抱きつかれれば悪い気はしないし、可愛らしい少女なら尚更だ。しかしこうもあからさまに群がってくると気持ち悪く感じる。アルゼンタムについて何か知っているわけでもないのに、ただ見た目と態度に寄ってきた他人。

吐き気がする。表面ばかり取り繕った人間のおぞましさは、言葉にならない。街に来るたびにこうして気疲れするので、買い物はいつも最低限だ。

アルゼンタムは甲高い声を聞き流しながら、誰にも聞こえないような声で呟いた。

「憂鬱だ」

見上げた空は抜けるような快晴。何故だか無性に、エルウとグロリーに会いたくなった。

09・・長い髪を

一通りの買い物を終えたアルゼンタムは、付いてくる少女たちをどうにか引き離して一軒のパン屋に立ち寄った。ドアベルの音を聞きつけて茶髪をポニーテールにした女性が顔を覗かせるが、アルゼンタムを見つけて露骨に顔をしかめた。

「アルゼンタムさん、今日もご苦労様です。よくうちに来るので女性客からの風当たりが微妙なのですが」

「貴女は安全だから、つついっ寄りたくなるんです」

「安全って、随分な言い草ですね」

眉をひそめて言い放つ女性に、アルゼンタムは苦笑を浮かべた。街での買い物が苦手なアルゼンタムだが、この店にはよく訪れる。というのも、彼女には言い寄られる心配というものをしなくて良いのだ。

「それに、あまり頻繁に来られると、旦那がヤキモチ妬くんですよ」

「……すみません、マライアさん」

女性――マライアは既婚者なのである。それも新婚ほやほやの幸せ絶頂期。淡々とした口調だが、旦那さんという時の緩みっぷりはなかなか可愛らしいところがある。

つまりアルゼンタムは新婚で幸せ絶頂期なところに、文字通りお邪魔しているわけだ。マライアの少し不機嫌そうな表情も当たり前といえた。それでもアルゼンタムを追い出したりせずに迎え入れる辺りは、人のよさが窺える。

「えっと、今日はいつものパンと……あ、新作出てますね。それもいただきます」

「毎度ありがとうございます」

アルゼンタムも、街の中での自分の立場は自覚している。だからマライアの店を訪ねればパンを買わざるを得ない。マライアが迷惑をこうむらないよう、あくまで客としての付き合いだ。

「いい匂いですね。柑橘系ですか？」

「はい、生地練りこんであります。焼きたてはもっと匂いも強いんですけどね」

たまに、パン作りの先生と生徒でもあるが。

オープンなども館にはそろっているのですが、たまにアルゼンタム自身も簡単なパンを焼くのだ。他の家事もあるのであまりかかりきりにはなれないが、料理は結構好きなのでいろいろ試している。

つい先日は、今まで立ち寄った世界の料理を一部再現してみた。が、グローリーは世間知らずゆえに普通に「おいしー」と食べてしまい、リアクションを期待していたアルゼンタムとしては切ない結果に終わった。いつかエルウに出して良いリアクションが欲しいところだ。

現在は長期保存のきく漬物に挑戦してみているが、たくあんが出来たところで果たして食べてくれるかは微妙である。アルゼンタムは育ちの環境の多様さの所為か、初見では手を出しにくいであろう納豆や生魚も普通に食べていた。ちなみにグローリーも影響されているので、食に関しては二人とも世間どころか世界から外れている。エルウが知ったらドン引きしそうだが。

「……アルゼンタムさん、今まで見たことがない悪い顔になりますよ」

「え、ああ、すいません」

思わず顔に出ていた。

魔術とやらで毎回驚かされている分、何かしらで報復しておきたいのだ。エルウとの仲はこれで悪いわけではないのだから不思議なものである。

マライアは首を傾げつつ、紙袋にパンを丁寧にに入れていった。アルゼンタムは代金を用意し、手渡そうとしたところでふと気付く。

「あれ、髪を少し切りましたか？」

「ええ、伸びてきたので。旦那に切ってもらいました」

正面から見ていたときは気付かなかったが、よくよく見ると後ろ

髪がばらばらの長さになっている。整えようとしたのだろうが、旦那さんはどうやらあまり器用ではないらしい。結い上げた髪房から中途半端な長さの髪が零れ、ポニーテイルのつもりなのだろうがハーフアップのようにも見える。

「もったいないですね、マライアさんの長い髪、好きだったんですが」

「そういうことを言うから女の子に包囲されるんですよ。というか、そんなに珍しいものでもないでしょう。茶髪なんてありふれています」

「そうかもしれませんが、でも……」

あの人も、ちょうどそんな色をしていた。長い髪をいつも適当に結い上げていて、それを綺麗に整えたくて。髪を触っている間は、しっかりと傍に居てくれたから。

「アルゼンタムさん？」

「え……？」

マライアの声で、アルゼンタムは現実引き戻された。昔のことを思い出すのは久しぶりだった。どうにも没頭してしまっていたらしい。そのまま答えないアルゼンタムに、マライアが案じるように覗き込む。

「どうしたんですか、ぼうっとして。今日はどこか具合でも悪いんですか？」

「そう、かもしれませんね。今日はこれくらいにしておきます」

「では、また今度」

マライアから紙袋を受け取り、アルゼンタムは柔らかく笑みを返した。短くなってしまった茶色の髪に、本当に残念だと思うとても似合っていたし、よく似ていた。何度も何度も、足を運びたくなるほどに。

言葉に出して次を約束することは、酷く躊躇われた。

「おかえり、アルっ」

「はい、ただいま戻りました」

台所で買ってきたものの整理をしていると、グローリーが慌てた様子で駆け寄ってきた。勢いよく抱きつき、まっすぐにアルゼンタムの顔を見上げる。アルゼンタムは手に持っていたものを置いて、腰に手を回して抱きつくグローリーを見下ろし苦笑した。

「どうしたんです？ 何かありましたか」

「えっと、アルが帰ってきてくれたから、凄く嬉しいの」

視線をさまよわせ、言いよどみながら、グローリーはぎこちなく笑みを浮かべた。嬉しいに違いはないのだろうが、何かひっかかりを感じているようだ。髪に指を通すようにして撫で、視線を合わせ

る。

「どうか、したんですか？」

「……アルは自由にお出かけできるけれど……私は、ここから出られないから」

だから、帰ってきてくれるか怖い、と。

グローリーは世間知らずで子供じみていても、賢く聡明だった。アルゼンタムが買物に出かけるのを見て、帰ってくる保証なんてないと気付くことができるくらいには。赤の他人でありまだ若いアルゼンタムが、グローリーを庇護する義務を持たないと察する程度には。

頭を撫でる手が止まったことに気付き、グローリーは縋るようにアルゼンタムを見上げた。呆然としてグローリーを見るアルゼンタムに震える声で、それでも毅然と言う。

「お願いします、帰ってきてください」

震える手、縋りつくような目、自分の価値を見下した顔。何もかもに覚えがあった。だから。

「……傍に、います」

割れそうな氷に触れるようにそっと、アルゼンタムはグローリー

ーの髪を撫でた。白から赤へのグラデーションをなぞり、言い聞かせるように繰り返す。

「ずっとずっと傍に居ます。たとえ貴女の元を離れても、きっと俺は帰ってきます。貴女を一人になんてしません」

アルゼンタムの言葉に、グローリーは戸惑いに視線を揺らした。複雑化する感情に揺さぶられているのは、アルゼンタムだけではないのだ。思考することを知ったグローリーは感情を自覚し、今までなかった揺らぎに戸惑う。

グローリーはしばしの沈黙の後、アルゼンタムに寄り添うように俯いた。か細く、声が漏れる。

「……信じてる」

髪を撫でる手を止めず、アルゼンタムはただグローリーを抱きしめた。それがどのような感情によるものか、自身でもよく分からなかった。

10：傷ついた指先

抜けるような青空の下、アルゼンタムは家庭菜園の収穫に精を出していた。

少しでも買い物に行く回数を減らそうと画策した結果である。トマト、ピーマン、ナスなどなかなかの出来だ。野菜の栽培など初めてだったが、やろうと思えば何とかなるものである。

と、雑草を取り除きながら野菜の熟し具合を確かめるアルゼンタムに、グローリーがパタパタと駆け寄ってきた。手にはしっかりとキュウリを抱えている。

「アル、いっぱい取れたー！」

「はい、ありがとうございます」

帽子ごしに頭を撫でてやると、ぱあっと表情が輝く。もつと撫でて、と言うように擦り寄る様子は、飼い主になつく子犬のようでもある。アルゼンタムは苦笑を浮かべながらも、言葉が続けた。

「お手伝い、ありがとうございます。疲れたでしょうから、一度休んでください」

「はあい」

グローリーは帽子を直しながら、離れの日陰に腰を下ろした。水筒に入れた紅茶を飲みながら、自分の手でもいだキュウリ物珍しそうに眺めている。普段食卓に並ぶものの、こうやって育てたりした経験はなかったのだから面白いのだろう。アルゼンタムは草取りの手を止めてそれを眺め、ふむ、と呟いた。

「植物の栽培は情操教育に良いって聞いたし、今後もしろいろやってみるか」

思考が教育ママになっていた。再び草取りを開始し、ぷちぷちと目に付いた雑草を抜いていく。その間にもグローリーの教育方針を考えているので、完全に保護者の思考回路だった。

「でもドレスで畑仕事はまずいし……簡素なワンピースとか、探し

てみようかな。ズボンは……ちよつとなあ」

帽子のつばを上げ、ちらとグローリーに目をやる。お手伝いする！　と言い出したグローリーに、アルゼンタムは急遽衣装探しに奔走することになった。

元々から用意されていた物やエルウが送ってきた物など、服は買わなくとも多くある。が、大半は貴族らしいドレスばかりなのだ。畑仕事には向いていない。

今回は装飾の少ないドレスを何とか探し出して着せ、日射病対策にアルゼンタムの予備の麦藁帽子を被らせた。そのため全体的にちぐはぐなファッションになってしまっている。

畑仕事を手伝うなら汚れても良いような、動きやすい服を用意するべきだろう。しかしいろいろな事情があるとはいえ貴族のお嬢様、パンツルックは少々問題な気もする。

「街の服屋でワンピースとかを買うか。あ、ついでに新しい髪飾りも買おう」

リボン系を充実させたいんだよなあ、と楽しそうに呟く様子は、確実に不審者だった。整った顔立ちが台無しである。畑仕事をしている時点でだいぶちぐはぐだが。と、

「きゃ……っ」

「グローリーさん？　どうし……グローリーさん！」

顔を上げたアルゼンタムの目に、瑞々しい赤が映った。白く小さな手に、赤い雫が膨らむ。ぷっくりと指先で膨らんだそれが指の腹で雪崩れる様は、グローリーの髪色をほうふつとさせた。遠目にそれを確認し、止まっていた思考が駆け巡る。

若干痺れた足で転びそうになりながら、慌てて駆け寄る。手を取ると血が零れて広がり、余計に痛々しく見えた。ポケットからハンカチを出して、そっと押し当てて血を吸わせる。

「な、なんで、こんな……っ」

「ごめ、なさい。ばらに触ろうとしたら、とげが」

離れの建物の傍にも、薔薇の植え込みがある。薔薇のとげは危険

だが、蒼を恐れるグローリーが蒼い薔薇に近づくわけがないと油断していた。

顔を青くしてハンカチの赤黒い染みに目を落とすアルゼンタムに、グローリーはおずおずと声をかける。

「痛くて、びっくりしちゃって。でも、そんなに深くないし、大丈夫だよ」

「そういう問題じゃありません！」

びくっ、と肩が震える。いつも優しく話しかけるアルゼンタムが、大声を上げることなど滅多にない。グローリーの手を掴むアルゼンタムの手に、無意識に力が入る。

「なんでっ、どうしてそんなことを！ 近づかなければ良いでしょう！」

「あ、あ……」

「怪我までして、何を考えているんですか！ もっと自分を大事に……っ」

「ある、あ……ごめ、なさ」

泣きそうな顔を青くして謝るグローリーに、すっと頭が冷えた。

グローリーは強く握った所為で白くなった指先を気にせず、ごめんなさい、と繰り返す。手の力が抜け、グローリーの手が重力にしたがって離れる。

「……いえ、謝るのは俺のほうです。痛かったですよね、ごめんなさい」

「アル……」

困惑と怯えをない交ぜにした表情。グローリーにそんな顔をさせるつもりではなかった。ただ心配で、動転してしまっ。傷一つつけないように大切にしようとしていたから、自分から傷ついてしまった彼女に苛立って。

グローリーの様子を窺いながら、再び手を取る。血は止まり、心配した怪我もそう大きなものではないようだ。一応、消毒してきちんと手当てするべきだろう。

「今日はもう部屋に戻りましょう。血は止まりましたけど、きちんと手当てしないと。……少し待っていてくださいね、片付けてきますから」

「うん」

放り出していた畑の道具を片付けにアルゼンタムが畑に向かう。

その後姿を見送り、グローリーは傷ついた指先を見つめた。

十
十
十
十
十

「それで、どうしてあんなことしたんです？ 何か理由があるんでしょう」

手当てを終え、アルゼンタムはようやく落ち着いて訪ねることができた。何か理由はあるだろうとは思っていたが、怪我が気になって聞くどころではなかったのだ。

グローリーはどう言葉にするか迷うように視線をさまよわせ、唇に力を入れた。ややあって、戸惑いがちに唇が動く。

「あのね、私、青いのが怖いけれど、お姉さまのことは怖くないの」

「エルウさんですか、あの人はまあ、少し特殊ですしね」

グローリーが恐れるスカイ家であり、美しい空色の髪を持つエルウだが、彼女自身はグローリーを疎んでいない。強大な力を持つ期待と羨望の的といえど、スカイ本家で暮らしているわけではないからかもしれない。むしろ本当の妹のように可愛がり、アルゼンタムが訪ねれば近況を聞いてくるのが常だ。

「でも、それとバラがどう関係するんです？」

確かに薔薇は青いが、空色とはだいぶ違う。エルウが平気になったからといって大丈夫なわけではないだろう。なにより、まだ”蒼”そのものに対する恐怖心というのは根強く残っているのだ。わざわざ近づこうという発想はなかなか出てこないはずだ。

アルゼンタムの言葉に頷き、グローリーは顔を上げた。まっすぐにアルゼンタムを見上げ、はっきりと言う。

「青い髪でもお姉さまのことは怖くないから、だから、きつと慣れれば青いのも怖くなくなると思う。そうすれば、本家の方々と会っても、怯えずにちゃんとしていられると思うの」

幼い顔立ちの中に、わずかに躊躇いと怯えを混ぜて。しかしグローリーは迷うことなく言い切った。普段のおどおどした様子とは違って変わって、固い決意が見て取れる。

「……本気、ですか」

長い沈黙の後、アルゼンタムはようやく、それだけを口にした。グローリーはこくりと、小さく頷いて言葉に出す。

「うん、本気だよ。すぐには無理でも、少しずつでも慣れていききたい」

「どうしてそんなことを？　ここに居れば、本家の方になんて会うことないでしょう」

「一年前のお姉さまの誕生パーティーで、私は怯えているばかりだった。もう、あんなのは嫌なの。お……叔父様やお父様と、ちゃんとお話したいから」

私のことを知りたいから、と。か細く続けた言葉に唇をかみ締める。

アルゼンタムと出会い、まともな人間扱いをされて始めて、今までの環境が劣悪なものだったのだと知った。感情を持ち、思考することを覚え、現状の異常さに気付いてしまった。なぜ自分は閉じ込められているのか、と疑問を抱いた。

「だから私は、立ち止まっていたくない」

凜と言い切るグローリーは、甘く可愛らしい姿でありながら澄みきった鋭利さもすでに持ち合わせていて。アルゼンタムは、ようやく、遅まきながら気付いた。

彼女はもう、人形なんかじゃない。

11…変化への揺らぎ

アルゼンタムは時計を確認しながら、煮出した紅茶を水筒に注いだ。やや小ぶりのサンドイッチの数を数え、バスケットに並べて入れる。それらを確認し、アルゼンタムはエプロンを外した。

バスケットにはサンドイッチを、水筒には紅茶。ピクニックの準備は完了だ。

あの後、手当てした後も変わらず、グローリーは薔薇に手を伸ばし続けた。アルゼンタムが見ていないときを見計らって近づくので、いつの間にか手に怪我が増えていた。手当てし怒り反省を促すのだが、それでも薔薇に突っ込んでいこうとするグローリーを押し止めて、アルゼンタムは提案した。

それなら、バラ園にピクニックにでも行きますか、と。

広大な敷地内には、薔薇に囲まれた中でちよとしたお茶会が出来るような東屋などもある。たまに掃除しており荒れては居ないので、簡単な昼食を取るくらいなら問題ないだろう。青薔薇に、ひいては”蒼”そのものに慣れる練習なのだから、それぐらいを目標としても良いはずだ。

「アル、まだあ？」

ひよい、とグローリーがキッチンに顔を出した。帽子を被ってつばを弄り、そわそわとしている。その様子にアルゼンタムは苦笑してバスケットを持ち上げた。

「今出来ました。そう急かさないで下さいよ」

「だって、楽しみなんだもん。敷地内だけど、お屋敷から離れるの久しぶりだから」

部屋に引きこもって読書するか、アルゼンタムの後を突いて回って手伝うか。代わり映えのしない日常の中でどちらかばかりなので当然といえた。

その代わり映えのしない日々の中でも、グローリーは着実に変化

し成長していたが。

グローリーに合わせゆつくりと歩くアルゼンタムの隣で、グローリーははにかみながら言う。

「ねえアル、ばらを摘んで部屋に飾ってもいい？」

「まあ、そうしたかったらそうしましようか。でも素手で摘んじやダメですよ」

「はい！」

わーい、と嬉しそうに両手を伸ばして笑う。アルゼンタムを追い抜いて、グローリーは屋敷の外へと向かった。苦笑して、アルゼンタムも追いかけてようとしたが、バスケットの存在を思い出してゆつくりと歩いた。せつかく綺麗に作ったのだから、崩れないように慎重に運ばなくては。

「アル、早くー！」

「今行きますよ、グローリーさん」

満面の笑みを浮かべ、グローリーはドアの前でアルゼンタムを待っていた。アルゼンタムはその姿に笑いかけ、バスケットを抱えなおして向かった。

十
十
十
十
十

迷路のように複雑な庭園の全てを、アルゼンタムは把握しているわけではない。よく使う魔法陣の位置だけを覚えて道を整え、あとはかなり放置している。

今向かっているのは、それらの魔法陣のうちの一つだ。ちょうどそこへ向かう途中に東屋があり、使うこともないだろうが目につくので掃除だけはしていたのである。何が役立つか分からないものだ。

「アル、あと、どれくらい？」

「あと少しですよ、グローリーさん」

「う、ん」

少しぎこちない返事に、アルゼンタムはため息をついた。しっか

りと袖口に指を絡ませて、グローリーはまるで未開の地に進み行く冒険者のような鬼気迫る顔をしていた。グローリーにとっては屋敷以外全てが未開の地なので、あながち間違っていないとも言えるが。そんな状態で、ろくに周囲を眺めることもなく歩いているのだ。当然、転びそうになるし歩み自体も遅くなる。その所為ですでに15分は経とうかというのに、歩いて10分でつくだろうと予想していた目的地はいまだ見えない。

周囲に咲き誇る蒼薔薇。屋敷をかなり離れたからか、アルゼンタムの剪定の手も回っておらず、やや野生的に薔薇が咲き誇っている。グローリーは最初こそ果敢に周囲を眺めていたものの、次第に顔を俯かせていき、現在ではほぼ足元しか見ていない。

グローリーの様子に、アルゼンタムの足も進みが悪かった。いくら本人が同意したとはいえ、流石にこんな荒療治には無理があったのだろう。ゆっくりと足を止めて、グローリーに呼びかける。

「……ねえ、グローリーさん」

「やだっ」

素早い否定だった。ぐいぐい、と催促するように袖が引っ張られ、アルゼンタムは困惑しながらも足を踏み出した。すでに今のようなやり取りは4回ほど行われている。アルゼンタムが氣遣い「戻りましょうか」と尋ねるのだが、帰ってくる内容は変わらない。変わったのは返答の速さだけだ。

5回目で名前のみなら、次は話しかけただけで否定されそうだととりとめなく思う。

アルゼンタムは、不思議で仕方がなかった。グローリーが蒼薔薇にこだわるのが、ではない。何故現状からの変化を望むのかという、根本的な部分において。

グローリーがアルゼンタムの予想外の事をするだなんて。ましてや逆らうなんて思いもしなかった。何度も何度も戻ろうと言ったのに、グローリーはそれを拒絶した。歩みがどれほどゆっくりになっても、足を止めなかった。小さく、そして精一杯の抵抗を見せた。

初めて、だろう。ここに住み込んで働き、グローリーとともに過ごした中で初めての拒絶。

アルゼンタムはどこかで高をくくっていた。蒼薔薇に囲まれた道を10分は歩かなければならないのだ。今までずっと”蒼”を恐れてきたグローリーが耐えられるわけがない。自分が促せばすぐに諦めて屋敷に戻るだろう、と。だからグローリーの意思を尊重しつつも、無理な荒療治にして。

それで、この代わり映えのしない平和な日々は守られると思った。変わらない、停滞し褪せた時間が澱む、ぬるま湯のような日々。それでいいじゃないか、と。

アルゼンタムは足を止め、目の前の光景に嘆息した。グローリーは相変わらず地面を見つめているが、足を止めたアルゼンタムに戸惑っているようだ。

「……、グローリーさん」

「な、なに？ 私戻らないからね？」

「顔、上げてください」

アルゼンタムの言葉に、グローリーの小さな肩が震えた。上げようかどうか迷うように、頭がふらふらと揺れた。アルゼンタムがそっと手を伸ばし、あやすように髪を撫でる。

「ここで戻っても、それは悪いことではありません。またいずれ慣れた後で挑戦すれば良いことです。ですから、ここで戻っても良いんですよ」

「や、だ……」

ぎこちなく耐えるように、グローリーは震える声で言った。アルゼンタムの袖を掴む手も振るえ、指が白くなるほど力を入れている。「ここで戻ったら、私もうだめになる。きっともう、こえられなくなる。だから、……大丈夫」

すう、と言葉を区切って、グローリーは深く息を吐き出した。ゆっくりと顔を上げて、アルゼンタムはその目に強い輝きを見た。

「今は、独りじゃないから」

甘く幼い声は変わらないのに、酷く大人びて聞こえた。そして、息を呑む音。アルゼンタムは苦笑を浮かべ、グローリーの傍に膝をついた。

「……おめでとうございます。到着、ですよ」

そこは、御伽噺の中から現れたような場所だった。

白い石で出来た柱が並び、深い蒼の屋根が日差しを遮る。柱には薔薇の蔦が絡まり、白い薔薇のレリーフの傍に蒼薔薇が揺れていた。柱の中の空間は綺麗に掃除され、同じく白のテーブルと椅子が並べられている。

グローリーはほう、と息を吐き出し、唇の端をゆつくりと上げた。目を細め、アルゼンタムへと笑いかける。

「すてき、だね」

「……そういつただけると幸いです。さ、おなか減ったでしょう」

立ち上がりバスケットを示して笑いかけると、グローリーは少しだけ唇を尖らせて不満そうに目を逸らした。

「ロマンチックなのに。私そんなに子供っぽい？」

「そんなつもりはありませんよ。それともグローリーさんは、サンドイッチはいりませんか？」

「アルのサンドイッチ！ 食べるよ！」

ぱっと顔を上げて、焦ったように早足でテーブルへ向かう。掴んでいた袖口から、指がするりと離れた。残っている皺が嘘のように、呆気なく。

アルゼンタムはそれを見つめ、銀色の目を揺るがせた。不安と、焦燥。正体の掴めない何かが、胸のうちでむくりと鎌首をもたげたようだ。

「アル、早くーっ」

「はいはい、今行きますよ」

グローリーの声に、自然と顔に笑みが浮かんた。グローリーの笑顔に、声に、アルゼンタムは笑顔を向けられる。だから。

だからまだ、大丈夫だ。

12…前触れのない異変

グローリーの部屋の花瓶に新しい薔薇を生けて、アルゼンタムはため息をついた。あのピクニック以来、グローリーは部屋に蒼薔薇を飾っている。理由を聞いてもはっきりと明確に言えないようだったが、それでも彼女が望むのなら、とアルゼンタムは定期的に花瓶の薔薇を変えていた。

「……また、5日くらいで様子を見るか」

かさり、と指先で触れた蒼薔薇が鳴る。色が褪せる頃には、鮮やかな蒼の薔薇に変える。グローリーがそれを望むからそうしているが、それでも追い詰めるようで心苦しい。

まだ完全に”蒼”に慣れた訳ではないようで、ときおり怯えるような顔も見せる。それでも以前に比べれば格段の進歩なのだし、もっと自身をいたわってもよいと思うのだが。

「どうして、こんなことするんだろう……？」

ぼつり、と零した言葉は紛れもない本音だ。アルゼンタムは何度も考えたが、よく分からなかった。何故変わろうとするのか、理解できない。

蒼を排除した部屋の中で、花瓶の薔薇は酷く浮いていた。

十
十
十
十
十

滅多に鳴る事のないドアベルが鳴り、アルゼンタムは眉をひそめた。この場所を知っている人間は限られているし、来ることが出来る人もあまり居ない。今まで訪ねてきたのはスカイ家の関係者と『組織』の知り合いくらいなものだ。そしてドアベルを鳴らすような律儀さを『組織』の面々が持ち合わせているとは思えない。

先日訪ねてきたときは『心眼』が食事のテーブルにアクションスター並みの動きで華麗に着地した。ついてきていた人も、それに

ノリノリで乗っかってポーズをとる。グローリーが喜んで拍手しなかったら、脆弱な腕力の全力で殴っていたところだ。

アルゼンタムはもう一度鳴らされたドアベルに、性急さを感じた。ますます訪問客は絞られる。

「一体、何の用だ……？」

アルゼンタムは軽く身なりを整え、玄関に向かった。幸い、グローリーは奥の書庫で読書中だ。グローリーのためにも、彼女とは顔を合わせずに済ませたい。

ドアを開けると案の定、バムルウが疲れた顔で立っていた。彼と会うのは何度目になるが、大抵疲れた顔をしているのが哀愁をそる。尤も、そそったところで慈悲も気遣いもないが。

「お久しぶりですね。ちょうど、一年ほどになるでしょうか」

「ああ……そうだな。あの子は、どこに？」

バムルウはちらりと室内を見回して聞いた。その表情は強張っており、どこか焦りも感じられる。じり、と嫌な予感が腹の奥底で渦巻いた。

「……ここで話すのもなんですし、どうぞ中へ。大したもてなしは出来ませんが、お茶くらいならだせますから」

す、と身を引いて応接間へ導こうとするが、バムルウは気まずげに目を逸らすだけで動かなかった。お互いの立場のため和気藹々とはまではいかないが、一応の礼儀を示そうと思ったのだが。どこかあわたらしいような、困っているような。

スカイ家の人間が困るなら困れば良いと思うが、バムルウは少々事情が異なる。グローリーの敵ともいうべき立場にありながら、唯一直接的に関わることもあってか、妙に同情するような態度を見せるのだ。中間管理職の辛さといったところか。

アルゼンタムは煮え切らない様子のバムルウに、回りくどさを感じた。こういう場合は、いっそ単刀直入に聞くに限る。

「何の用ですか」

「……君に話すことじゃない」

「グローリーさんに関わることなら、俺にだって関わることで
一体、何をしに来たんですか」

バムルウはアルゼンタムの言葉にたじろぎ、迷うように視線をさ
まよわせた。言うか、言わないか、と迷っているのがよく分かる。
つまり、隠している情報があるのだ。

「教えてください」

もう一押しすれば喋るだろう、とアルゼンタムは言葉を重ねた。
が、きし、と微かな音と共に、今一番あってはならない声が聞こえ
た。

「アル、誰か来たの……っ、あ」

引きつるように途切れた声に、アルゼンタムは慌てて振り返った。
ドアが開き、グローリーが顔を覗かせている。見る見るうちに顔色
が悪くなり、持っていた本が床に広がった。

「……ちようど良い。探す手間が省けた」

アルゼンタムが止める間もなく、バムルウが一步踏み出す。グロ
ーリーの身体が強張り、アルゼンタムはすぐに駆け寄ろうと足を踏
み出した。が、

「汝の器を司りし時よ凍れ 自由を奪う枷を与えん トウステイ
”」

バムルウの言葉が終わると同時に、ずしりと身体が重くなったか
のような違和感がアルゼンタムを襲った。魔術だ、と判断したが、
魔力をもたないアルゼンタムには何も出来ない。ただ、黙ってみて
いることしか。

アルゼンタムが動けないことを確認し、バムルウは再びグローリ
ーに向き直った。そして、わずかに瞠目した。

「……これは」

「あっ……アルに、何をしたの……っ？」

グローリーが怯えて震えながら、まっすぐにバムルウを見ていた
のだ。というよりも、敵意を持って睨んでいる。バムルウは予想外
のことにたじろぎ、しかし一步踏み出して答えた。

「……彼を傷つけたわけじゃない、少し身体の自由を奪っただけだ。数分もすれば解ける魔術だから、そう心配しなくてもいい」

「いま、すぐ、といってっ。ここから、で、出て行ってっ！」

スカートの布地を握り締めて、グローリーは震える声で叫んだ。一年前は話すどころか、顔を見ることもできなかった少女が、声を張り上げて糾弾する。バムルウは信じられないものを見たような顔でグローリーを見た。

「出て行くさ、すぐに。……だが、お前も一緒にだ」

「え……」

「本家の命令だ。グローリー・タブー・スカイの身柄を本家に移し、然るべきときの為に準備すること。お前はこれから、本家の屋敷で暮らすことになる」

バムルウの言葉に、グローリーの顔がすう、と恐怖に染まっていた。あ、う、と意味を持たない音が唇から零れ、収まっていた身体の震えが激しくなった。

「ひ、いや、嫌あ……っ」

「拒否権はない。これもスカイ家の為だ」

こつ、とまた一步バムルウが近づき、グローリーはよろめくように後退した。その僅かな抵抗にバムルウは唇を引き結んだが、すぐに口を開いた。

「……」これは安らかなる碇 一度の闇に身を任せよ スリープ」
「っ、あ……」

強張っていた身体の力が抜け、グローリーの身体がふらふらと揺れた。急に襲った眠気に混乱しながらも、バムルウから離れようと足を動かす。が、上手くいくはずもなくすぐに床に崩れ落ちる。

バムルウは嘆息し、グローリーを抱き上げた。そして呆然とするアルゼンタムを見やり、表情を悲しげに歪ませる。

「おれがここを出て行けば、すぐに動けるようになるだろう。すまない、手荒なことはしたくなかったんだ」

何かに喉を押さえられたような圧迫感がある。が、全く声を出せ

ないほどではない。アルゼンタムはバムルウを睨みつけ、緩慢にしか動かない口を動かす。

「なん、で……っ」

「スカイ家の中の立場が変わった。もう、『闇夜空』は使えないから。……代わりが必要になったんだ」

「か、わり……っ？」

代用とするもの。スカイ家、立場。『闇夜空』、エルウ・ダーク・スカイ。

今のスカイ家には、子供が居ない。

「……っ、あ」

エルウに何かあれば、スカイ家の後継に代わるのはグローリーしか居ないのだ。たとえ髪が赤くとも、他に兄弟姉妹はいない。血筋を絶やさないとという唯一の手段。

「……話しすぎたな。いや、もう君には関係のないことだ。君の雇用については、おって連絡する」

アルゼンタムの横をすり抜け、バムルウの足音が遠のく。来たときよりもやや緩慢な歩きは、グローリーを抱いているからか。アルゼンタムはその音に、既視感を感じた。否、昔どこかで聴いたイメージがある。遠のく足音、自分ではない誰かの重み。

「あ……」

身体が震え、存在しない過去の記憶が頭の中でうるさく喚く。覚えがない、首に冷たい金属の重み。

「あ、あ……いや、だ。いやだ、嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ置いていかないで独りにしないで良い子にするからお願いお願いしますどうしてなんで悪くないぼくはわるくない——」

——こんな、まちがってる」

銀色の光がはじけ、世界が正しく歪められた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969t/>

蒼銀の光

2011年12月18日18時02分発行